



明石のコミュニティ・スクール

未来にむけて 学びをかえる

未来を創り 社会を支える 新たな学びと育ちのシステムづくり

Twitter



YouTube

KomiKomiSukuSuku

明石市教育委員会事務局学校教育課 mail: gakkyo@city.akashi.lg.jp

For The Future

No. 185

2022

11.16

「あさぎり わくわく ラボラトリー」が開催されました

11月9日(水)に朝霧小学校で、“令和3・4年度明石市教育委員会指定、新しい時代の教育「教科・総合」研究発表会”として、「あさぎり わくわく ラボラトリー」が開催されました。「あさぎり わくわく ラボラトリー」のネーミングに何を発表するのと、戸惑われた方もおられるのではと思います。「あさぎり わくわく ラボラトリー」で紹介されたメイキングビデオの中で「一本の電話から始まった」と紹介されていましたが、その一本の電話が従来のような教科・総合の研究

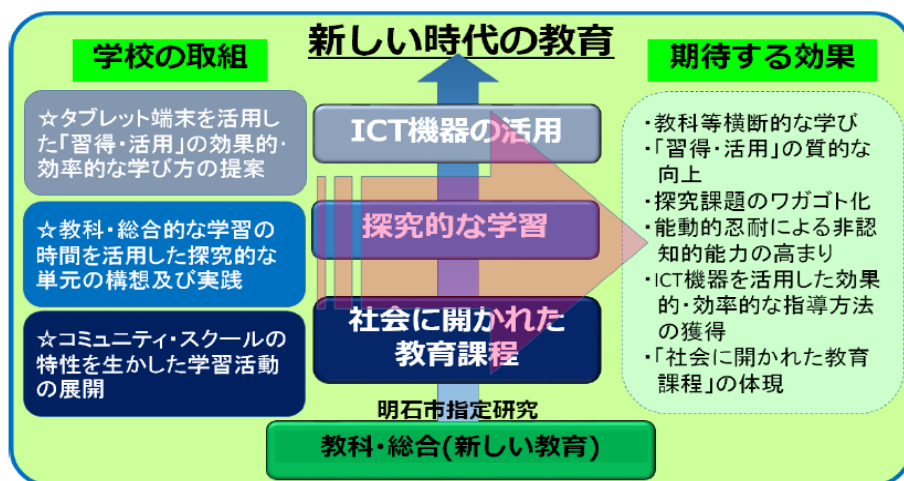


図:「新しい時代の教育」に向けた教科・総合(新しい教育)の構想

その研究の内容を3つの柱として次のように考えました。

- (1) 探究的な単元の構想及び実践
- (2) タブレット端末 (ICT 機器) を活用した効果的な学び方の提案
- (3) コミュニティ・スクールの特性を生かした学習活動の展開 (社会に開かれた教育課程)



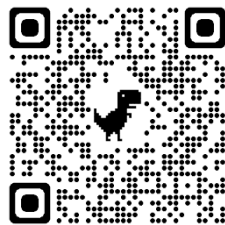
こうした研究をとおして、子どもの主体性が育まれることを期待しています。子どもが主体的に意欲的に知識を獲得したり、獲得した知識を自ら活用しようとしたりするためには、数値では測ることが難しい“学びに向かう力・人間性”としての非認知能力の高まりが必須だと考えています。「新しい時代の教育」では、これまでどちらかといえば認知能力面に重点が置かれが

ちな“授業づくり”の視点から、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、そして「学びに向かう力、人間性」がバランスよく育まれる“仕組づくり”へと移行していくことを期待し、スタートしたものです。こうした背景もあり、朝霧の先生方が、指定は受けたものの、何から手を付けたらいいのか本当に迷われたようです。その迷いの中から生まれたのが「みんなでラボ(熟議)ろう」



です。「生きて働く力」を高める対話の場として、「人はなぜ学ぶのか」「自由とは何か」など「そもそも論」や「根っ子の部分」などをテーマに、様々なメンバーと対話ができる場として「みんなでラボ（熟議）ろう」がスタートしました。そして迷いの中で出会ったのが「High Tech High（アメリカの公立高校）」です。2015年に作成された「High Tech High」のドキュメンタリー映画である「Most Likely to Succeed」を教職員と地域の方で鑑賞する機会をつくるなど、「High Tech High」の理念の共有を目指してきました。その中で学校教育目標「人とつながる社会とつながる 未来とつながる学校～主体的に学び、共に新たな価値を創造する子の育成～」もこれから学校が目指す方向を示した目標としてリニューアルし、その実現に向け、朝霧流プロジェクト型学習をとおして子どもたちの学びを社会とつなげ、試行錯誤する学びを保障しながら、互いに高まっていくことを目指し、研究テーマを、「社会とつながり、探究し続け、自己を高めていく人間の育成」と設定されたと考えます。朝霧小学校は「子どもとの対話、職員同士での対話、地域の皆さんとの対話を大切にしながら、子どもたちの学びを社会とつなぎ、地域全体で子どもたちの探究を支え、子どもたちが育っていく環境を整えていく」という仕組みを創っていかうとされているのだと思います。「子どもが育つ仕組み」と考えたとき、ひょっとしたら、朝霧小学校の先生方の視点と、参観者の視点にはズレがあったのかなと感じます。一つの授業の一時間のながれではなく、その授業や活動がどうつながっているのか、朝霧小全体で創ろうとしている仕組みの中でどのように機能しているかといった視点が必要だったのではと感じたりします。ただ、そうしたズレが、分科会や「公開ラボ（熟議）ろう」の中で埋まったのではと感じました。参加された先生方が各学校に持ち帰り、各校でラボが始まったり、新学習指導要領の目指す「生きる力」が育つ仕組みを各校で考え始められ、そうしたことを持ち寄って、2月の「あさぎり わくわく ラボラトリー」を迎えることができたら面白いなと思います。

コミュニティ・スクールって何？ その2 「なぜ“社会に開かれた教育課程”が必要なの？」をアップしました



<https://www.youtube.com/watch?v=mgMKzr7lx9E>

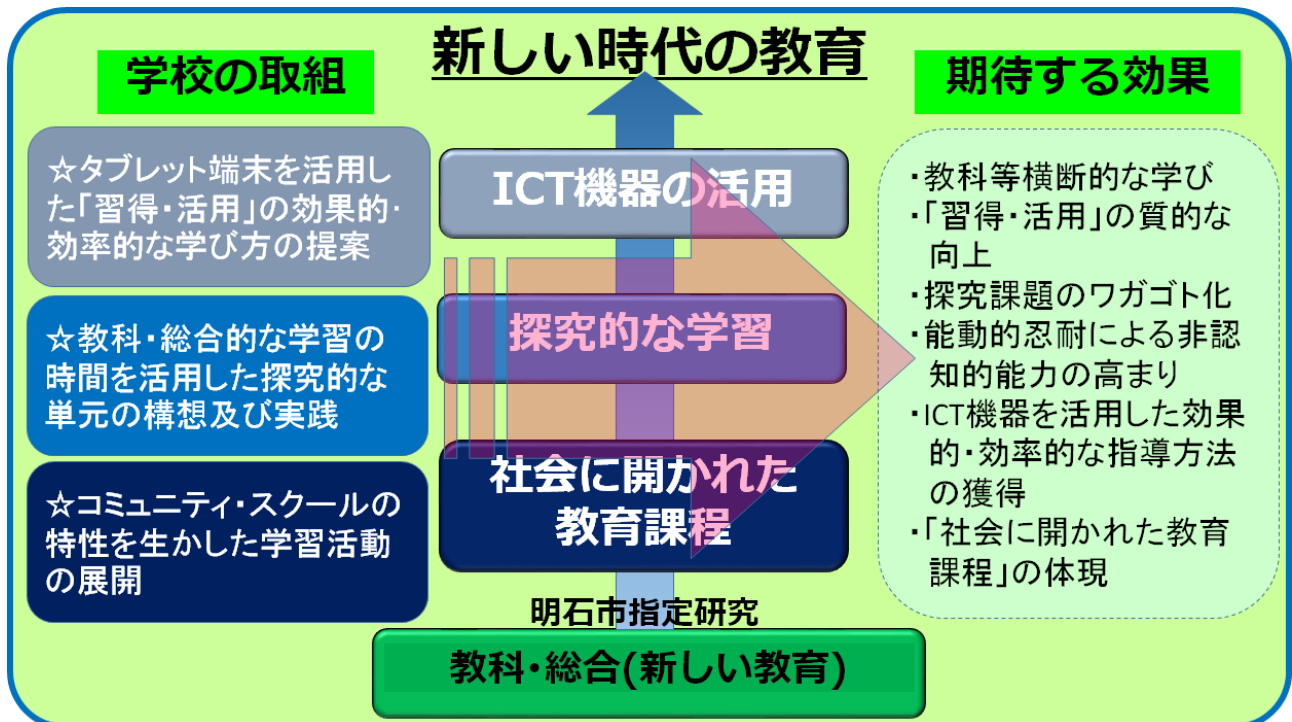
「コミュニティ・スクールって何？その1 今、なぜコミュニティ・スクールなの？」に続き、第2弾としてコミュニティ・スクールって何 その2 「なぜ“社会に開かれた教育課程”が必要なの？」をアップしました。今回は2分40秒にまとめ、皆さんが“社会に開かれた教育課程”について考えるきっかけになればと、CSマイスター・前兵庫教育大学教職員大学院教授の小西哲也先生にご助言をいただきながら作成しました。たくさんの方に「社会に開かれた教育課程」に目を向けていただけるきっかけとしてご視聴いただけたらと思います。

(文責：北本)

「新しい時代の教育」に向けた指導方法の工夫・改善を踏まえた指定研究の方向性

1. 令和3年度より市教委が提案する新たな指定研究の内容

現在の指定研究に位置づく、「教科・総合(教育課題)」分野を活用し、今子どもに求められる資質・能力育成に資する研究内容を提案する。令和3年度より実施する分野を「教科・総合(新しい教育)」とする。新たに設けた内容についての構想を以下に示す。



図：「新しい時代の教育」に向けた教科・総合(新しい教育)の構想

2. 「教科・総合(新しい教育)」を設けた目的

今、学校教育では校種を問わず「探究的な学び」を保障する必要性が高まってきている。それは、学習指導要領に記されている通り、予測困難な時代を生きる子どもたちにとって主体的な問題解決に向かう資質・能力の育成が求められているからである。

また、コロナ禍においてオンラインを活用した授業形態やタブレット端末を用いた学習指導が急速に浸透しつつある。本市においてもタブレット端末の導入が決まっており、その効果的な活用が期待される。その効果は、「習得・探究」の双方に見られると期待しており、タブレット端末と他のICT機器を複合的に活用し、図やイラストを巧みに用いることで学習内容の効率的な習得が期待できる。また、探究場面においても、調べ学習のツールとして活用したり、言語活動の場面において自分や他者の考えを容易に視覚化したりするなど学習活動の充実が期待できる。これらの効果的・効率的な活用の仕方を学校の取組として成果を挙げることは市立小・中学校にとって大変意義のあることだと考える。

さらに、「社会に開かれた教育課程」を体現することも求められる。本市はコミュニティ・スクールの推進に注力している。学校と地域、家庭の三者が一体となって「未来の担い手」「地域の担い手」を

育むことを目指すことがコミュニティ・スクールの特性である。この特性を生かし、地域と直接的につながる学習活動を構想することが「社会に開かれた教育課程」を体現するうえで効果的である。

本市では以上のような社会的な要請を加味し、「教科・総合（新しい教育）」を設定した。指定研究校が先進的な成果を挙げ、その成果を市立小・中学校に浸透させることを目的とする。

3. 研究の内容及び方法

(1) 研究の内容

①探究的な単元の構想及び実践

総合的な学習の時間では、単元を通して追究する「探究課題」を設定し、その課題解決に向けた学習過程及び単元を構想する。教科では、学習内容に応じて探究的な学習過程を組み込んだ単元を構想する。そのような単元の実践を通して学ぶ子どもの姿を見取る。

②タブレット端末を活用した効果的な学び方の提案

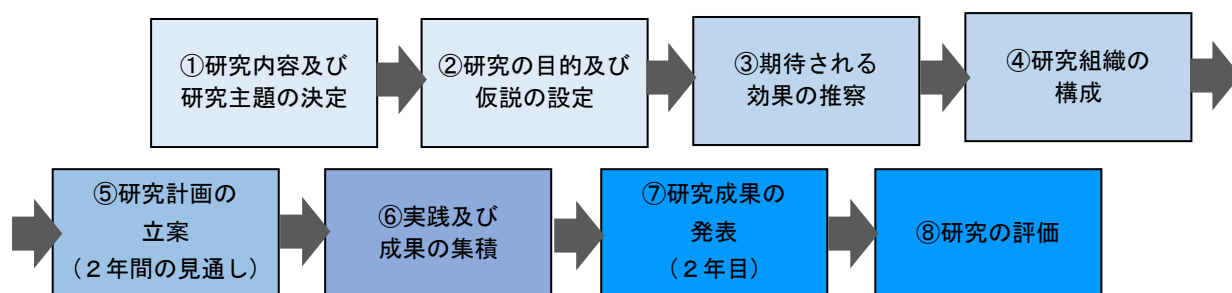
学習内容の「習得・活用」双方の場面に効果的な指導方法を導き出す。一斉指導の形態で授業を行う場面、少人数学習で行う場面等いくつかの場面でのタブレット端末の活用方法を探る。また、タブレット端末を用いた活用場面での指導方法や個別の課題に最適化された指導方法についての取組も期待する。

③コミュニティ・スクールの特性を生かした学習活動の展開

具体的には、地域人材を活用した学習活動を展開する、地域の方が継続的に関わる学習展開、地域の方の生きがいにつながる学習活動、これらを満たす単元、学校行事を計画・実践する。子どもの学習活動、そこでの学びを地域・家庭に開き、子どもの学びを多面的に捉える。

(2) 研究の方法

「研究の内容①～③」に示す内容についていずれかの内容について取り組む。もしくは、3つの内容を横断的に取り組むことも可とする。



4. 期待する効果

構想図に示すように、すべての研究内容に効果が期待できる。総じて期待することは子どもの主体性を育むことである。子どもたちが自ら目標を立て、それが達成できれば自己肯定感が高まり、次の学習の意欲へとつながる。この自己肯定感が非認知的能力と言われる一つである。子どもが意欲的に知識を獲得したり、獲得した知識を自ら活用しようとしたりするためには、数値では測ることが難しい非認知能力の高まりが必須である。子どもの主体性は教師の指導によって育まれると言われる。本提案による新たな研究を通して、教師が意図的・計画的に子どもの学習活動を構築し、将来にわたって自ら学ぼうとする主体性が育まれることを期待すると同時にその成果が深く浸透することを望む。